

## 歴史と民族

福井憲彦

西ヨーロッパが築いてきた文明や価値観、あるいは近代化のありかたに対する批判の声が、西ヨーロッパ自身の内部からあがってくることは、かならずしも最近にのみ見られることではありません。「機械文明は、野蠻の最後の段階に來てしまっている」とかつて書き記したのは、フランス

スの著名な作家カミュであったように記憶しますし、さらに遡ってニーチェの存在を指摘することもできます。ところで、ことにこの十ないし二十年來、フランスの歴史学界に顕著な革新の動きもまた、ヨーロッパの近代化とそれをささえた価値観のヨーロッパ内部からの再検討、ヨーロッパ

を中心主義的な歴史のみかたに対する、つまりヨーロッパ社会の発展の筋道になぞらえて、それとの距離や偏差でもってヨーロッパ以外の社会の歴史を捉えようとするみかたに対する、徹底した批判などを含んでいる点で、まことに興味深いものといえます。

もちろんそうした動きは、フランスやヨーロッパ内部に限ったものではありません。『脱病院化社会』（晶文社）や『脱学校の社会』（東京創元社）などの邦訳で知られるイヴァン・イリッチのように、第三世界との接点に位置しながら、現代社会への根源的な問いかけを続けている人の存在

を忘れることはできないからです。彼の問が根源的であるというのには、専門医療化や学校教育の問題を直接には取りあげながら、彼のまなざしと問いかけとが、常に現代社会全体のありかたにむけられているからにはかなりません。

フランスの歴史家たちもまた、いちばやく全体史とか社会史とかの表現のもとに、歴史を個別専門化や細かな領域区分の中に閉じ込めてしまうことに、ノンを言い続けてきたのでした。全体史とか社会史とかの表現は曖昧にすぎるといふ誇りがあるかもしれません。たしかに全体史というのは、歴史家にとって見果てぬ夢ともいえます。しかし、むしろそういう、多くの事柄を包摂しうる茫漠とした概念なればこそ、敢えて用いるのだというリュシアン・フェーヴルの言葉を引いておきましょう。もちろんそれは蒙昧主義を意味するものではありません。現在のフランスにおける歴史学の革新にとって、その先駆者のひとりとして導きの糸を与えたフェーヴルの考えについては、彼の著者『歴史のための闘い』（創文社）を読むにしくはありません。

このフランスにおける新しい歴史学の動向については、口にされるほどよく日本に紹介されてはいないのが現状なのですが、さしあたりル・ゴフ『歴史学と民族学の現在』

（『思想』一九七六年十二月号）や、今秋刊行予定の、ル・ゴフとならぶもうひとりの代表的歴史家ル・ロワ・ラデュリの『歴史人類学への道』（邦訳仮題―原題は『歴史家の領域』―新評論）が、そのイメージをつかむのに役立つかと思われまます。それらの表題にもあらわれていますが、最近のフランス歴史学界における革新の方向のひとつの重要な点は、歴史学と民族学ないし、より広く言って人類学との協同、あるいは人類学的方法とまなざしとを持った歴史学ということにあります。もちろんそれ自体は、ただ歴史学にのみ関ることなのではなく、社会についての認識あるいは知の体系についての、全体的再検討という動きと不可分なのですが。

それは、近代化についてのわれわれの捉え返し作業にとつて、実は大きな意味をもっています。そこでは、人間と社会のありかたをその日常性において捉えること、人々の日常生活のありかた、家族や親族関係をはじめとしたさまざまな人間の結びつきかた、諸階層を成す社会的結合関係、人々の日常的な意識のありかた、慣習や習俗などを、過ぎ去った社会の中に問うことなどがめざされます。それは当然ながら、近代化が本格的に始まる以前、いわゆる伝

統社会の中で重い比重をもつことは言うまでもないわけですが、また近代化の波の中でも、しばしばそれへの抵抗要因という形で従来問われてきたことからわかるように、さまざまな歴史の変容を蒙りながら現代へとつながる問題でもありません。逆に言えば、もっぱら限定的な空間の中で存在してきた民衆の生活と文化の独自のスタイル（たとえば地域文化や地域経済のことを想起されたい）を打ち破る方向でのみ、近代化は推し進められてきたとも言えます。フランスでいえば、まさにフランス革命後の十九世紀以降が、その過程にあたることとなります。従来、ともすれば、民間に伝承されてきた習俗・慣習や生活のスタイル、人々の意識やものごとの捉え方は、近代化への抵抗要因、つまり遅れたものというレッテルを受けることのみ多かつたか、あるいはその裏返しで、逆にノスタルジীর対象であるかであったのではないのでしょうか。いま歴史学は、伝統的社会についても、まさに近代化が進められていく社会についても、伝統社会におけるかたから変容を蒙りながら伝承されてきた人々の日常性を問うことから、近代化の捉え直しにせまろうとしているかに思われます。さまざまな政治的事件、蜂起や革命といった非日常的

出来事も、また、そうした日常性との関係の中で新たな光があてられることになりました。

以上のことは、次のようにも言えます。つまり、近代化を推進してきたエリート層、その合理主義的価値観、文化、そして強力な国家、生産力の増強へむかおうとする国民経済などなどの、近代化のより一層の進展という変化を推進する諸力に対して、その推進の中で、ある時は切り捨てられ、また包摂されてしまい、ある時は従属化され周縁化された形での存続を余儀なくされた、そうした事柄に対するまなざしを取り戻すことを可能にすると。こうした観点からすると、定住者の世界にとっての日常性と、非定住者の世界との関連という問題も、重要性を帯びたものとなつてきます。すでに巷間話題となっている阿部謹也『中世を旅する人々』（平凡社）は、そうした移動する人々から中世社会を眺めて、一般に新しいイメージを与える好著といえるでしょう。しかし阿部氏の一連の仕事は、われわれの関心対象たる近代化との関係で考えると、そのまま近代へもつてくる、あるいはつなげてくるというわけにはいかないように思われます。なぜなら特にドイツが近代へ進むにあたっては、宗教改革の嵐と三十年戦争というカタスト

ロフとを通らねばならないからであります。フランスにおける民俗学ないし民族学の系統には、幾つかの筋が考えられるのですが、最近邦訳の出たヴァラニャック夫妻『ヨーロッパの庶民生活と伝承』（白水社、クセジユ文庫）は、その重要な一系統を示すものといえます。

ところで、こうした日常的な民俗への注視の中で近代化を再考することは、われわれ日本人にとってはまた、純粹にヨーロッパやフランス史の問題ではなく、明治以降ひたすらヨーロッパの近代化をモデルとしてきた日本の近代化を考え直すことでもあります。となると、われわれの頭に直ちに浮かんでくるのは、柳田国男の名でありましょう。

彼の著作は読みものとしても面白いわけですが、もちろん面白いだけでは歴史分析に应用することはできません。その点、柳田民俗学を社会変動論として理論化しようとしている鶴見和子氏の仕事（たとえば『漂泊と定住と』筑摩書房）は、歴史研究者にとっても興味深いものがあります。フランス史の新しい動向の中で、民族学ないし人類学との学際的作業が少なからぬ位置を占めるとのべましたが、柳田民俗学の考え方、たとえば良く知られたハレとケとの関係、定住者と非定住者との関係とマツリの問題などは、フ

ランス史を考える者にとってもたいへん示唆的な理論、ヒントをもたらししてくれるものといえましょう。

日本でも近年、民俗学と歴史学の境域を越え出ようとする、あるいは民俗学的な目をもった歴史学、ないし歴史学的目をもった民俗学の作業が公刊されていることは、注目に値しましょう。私が思い浮かべているのは、宮田登『神の民俗誌』（岩波新書、高取正男『神道の成立』（平凡社）、文字通りの民俗学とは異なりますが、病に対する人々の対応という点で興味深い立川昭二『近世病草紙、江戸時代の病氣と医療』（平凡社）などがあります。こうした作業と成果とが今後とも蓄積されることで、歴史学も民俗学も新たなふくらみを持ちうることになりましょう。近代か伝統かというような不毛な二者択一的設問ではなくして、新たな光の中で近代化の問題を考えようようになるのではないのでしょうか。

（東京大学・西洋史）